

【100年後の水をとりまく環境】

100年前といえば、日本は大正デモクラシー。内地の人口は約5,600万人だが、台湾の人口が約375万人、朝鮮半島の人口が約1,700万人で、平均寿命は約42～43歳と現在の半分であった。国内総生産(GDP)はまだその概念が生まれていなかったが、購買力平価で実質現在の5～6%程度に過ぎなかったと推計され、電燈普及率が6割で、水道普及率は2割程度、電話加入数は50万程度であった。東京の平均気温は14.2度と現在の16.4度よりも2.2度低かった。農業従事者が就業者の半数を占め、日本中に用排水路が張り巡らされ、小学校の水泳用プールの普及率は10%にも満たなかったと推定される。関東大震災も阪神・淡路大震災も東日本大震災もまだで、太平洋戦争直後に日本を襲ったカスリーン台風や伊勢湾台風などの水害が生じる前であり、大河津分水路は完成間近で、荒川放水路はまだ工事中だったのが100年前である。

100年前から現在までの変化に思いを馳せると、水をとりまく環境、普段のわたしたちの暮らし、そして人生のあり方そのものが大きく変わっているのにめまいを覚えるほどである。これから100年すれば、過去100年ほどではないにせよ、やはり思いもよらないような変化が生じるに違いない。

それなのに、100年後の水をとりまく環境が現在から良くなると答えた方も悪くなると答えた方も10年前に比べると概ね減っている。現状への満足なのか、失われた10年、20年というプロパガンダで変化への希望を失ってしまったのかは不明だが、変化に期待しなくなっている、ということだろうか。

森林が荒廃する、水道水が飲めなくなる、水道使用量が増える、人工降雨の実現などについてはややそういう見通しを持つ方の割合が増えている様だが、おもしろいのは、水道料金が無料になるという少数の方々の割合も、水道料金が高騰する、という3割程度の方々の割合もどちらも増えている点である。水道法改正に伴って水道事業の在り方が変化しつつある中、両方の見方が交錯しているのかもしれない。

好む好まざるにかかわらず世の中は変わるし、できれば好ましい方向に変化した方が良い。水をとりまく環境についても、そんな夢と大志を抱けると良いのに、と思う。

コロナ禍における日常の水意識

新型コロナウイルス感染症の拡大により社会が急変し、私たちの日常生活も大きく変わりました。そこで、コロナ禍における生活、水への意識・実態の変化を探る設問で調査したところ、手洗いなど感染対策における直接的な項目での顕著な変化に加え、料理をする頻度や、海・川に行く頻度の増減からも、テレワークやステイホームによる間接的な影響を垣間見ることができました。

Q.手を洗う頻度は？ (3択)

Q.1回あたりの手を洗う時間は？ (3択)

Q.入浴やシャワーの頻度は？ (3択)

◇手を洗う頻度は約7割、1回あたりの手を洗う時間は約半数が「増えた」。

入浴やシャワーの頻度は「変わらない」が大多数。

手を洗う頻度は、全体の約7割(68.3%)が「増えた」と回答し、「変わらない」(30.9%)を大きく上回りました。また、1回あたりの手を洗う時間についても、半数近く(49.8%)の人が「増えた」と回答。感染対策における個々の取り組みがそのまま表れた結果と言えます。一方、入浴やシャワーの頻度については、大多数の人が「変わらない」(86.9%)でした。

Q.料理をする頻度は？ (3択)

Q.洗濯の頻度は？ (3択)

Q.掃除(水拭き)の頻度は？ (3択)

◇料理の頻度は約3割が「増えた」も、洗濯・掃除は8割超が「変わらない」。

料理をする頻度は、全体の約3割(27.5%)が「増えた」と回答しました。一方、洗濯の頻度は、「変わらない」が81.3%と大半を占め、「増えた」は15.0%と少数派でした。また、掃除(水拭き)の頻度も、8割超(83.8%)が「変わらない」、「増えた」は1割程度(11.9%)で、洗濯とほぼ同様の傾向でした。

Q.海・川・湖に行く頻度は？（3択）

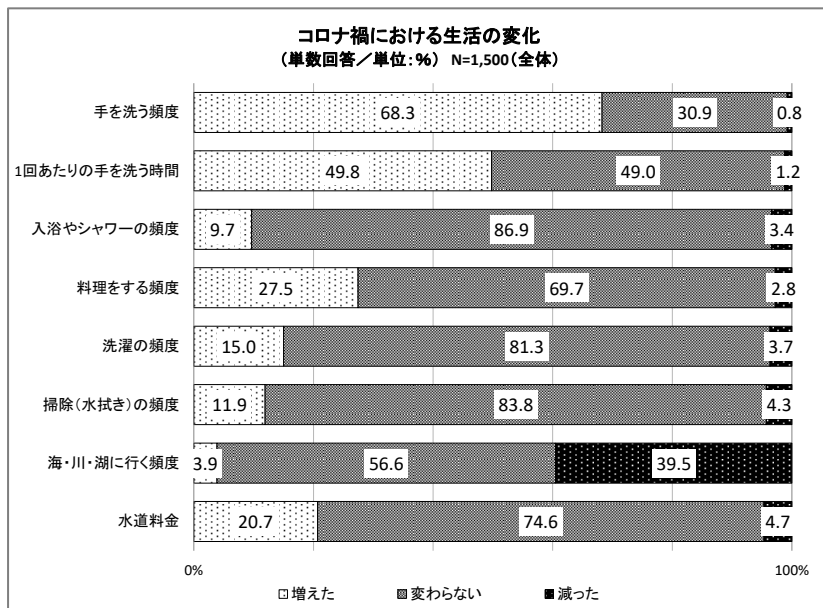
◇約4割が「減った」と回答。

海・川・湖といった水辺に行く頻度は、「変わらない」が過半数を占めるものの、約4割（39.5%）が「減った」と回答。コロナ禍でステイホームを強いられ、外出の機会が減少していることをうかがわせる結果となりました。

Q.水道料金は？（3択）

◇「増えた」人は2割程度。

水道料金については、「増えた」と回答した人が20.7%となりました。コロナ禍における生活で、自宅での手洗いや料理をする機会の増加に伴い、水を使う量は総じて増えているであろうと推測されますが、水道料金が変わったという人はそれほど多くはないようです。



節水の意識と行動

Q.日常生活で節水を意識しているか？（2択）

Q.日常生活で節水を実施しているか？（2択）

Q.コロナ禍で節水を意識する機会は増えたか？（3択）

◇節水意識と行動、ともに昨年を下回るもほぼ変化なし。コロナ禍で節水意識が上がった人は2割程度。

生活者における節水への意識と行動の明確化を目的に、2019年より新たな設問で行っている節水評価ですが、今年の結果は、節水を「意識している」が66.3%、節水を「行っている」が66.6%となりました。いずれも昨年（意識:69.5%、実施:68.5%）をやや下回ったものの、ほぼ変化はなく、これらの結果からは、コロナ禍の影響はほとんど見られませんでした。

ちなみに、コロナ禍で節水を意識する機会が増えたかについて聞いたところ、7割超（75.6%）が「変わらない」と回答し、「増えた」人は2割程度（22.7%）でした。

